

Title	エディプス・コンプレックス・モデルとしての「科学 的心理学草稿」 : 初期フロイト理論の再検討
Author(s)	竹中,均
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7900
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# エディプス・コンプレックス・モデルとしての「科学的心理学草稿.

― 初期フロイト理論の再検討・

## エディプス・コンプレックス理論再検討における

科学的心理学草稿」の重要性

1

の余地はないように見える。・コンプレックスという概念が何を表すかについては、もはや疑問のメカニズムを受け入れるにせよ受け入れないにせよ、エディプス母ー子の三角形をめぐる葛藤のメカニズムは余りに有名である。こされて以来、約一世紀の間、多くの論議を引き起こしてきた。父ーエディプス・コンプレックスという概念は、フロイトにより提起エディプス・コンプレックスという概念は、フロイトにより提起

織的な説明はしていないのである」。とすれば、私たちのエディプによれば、「フロイトはどこにもエディプス・コンプレックスの組

このような特異な論文の視点を取り入れることによって、エディプ

しかしながら、ラプランシュ・ポンタリス『精神分析用語辞典』

いての「常識」を、もう少し慎重に考え直してみることも出来るは再構成だということだ。ならば、エディプス・コンプレックスにつリジナルというわけではなく、多かれ少なかれ後世の研究者によるス・コンプレックスについての「常識」も、フロイト自身によるオ

竹中

均

ずだ。

フロイト理論全体の中で、良くも悪くも、特異な位置を占めている。身、公表することを望まなかった私的な論文であるにもかかわらず、る。「草稿」は、著者の生前には公表されることなく、また著者自いるのは、「科学的心理学草稿」(以下、「草稿」と略する)というス概念の再検討を行えるのだろうか。筆者が本稿で試みようとして

それでは、どのような視点を取れば、エディプス・コンプレック

である。 ス・コンプレックス概念の洗い直しが可能ではないか、と考えたの

Work'の部分で見てみよう。 Work'の部分で見てみよう。 Work'の部分で見てみよう。

の臨床的意義と理論的意義との不愉快な分離」)。

「性いう点である。そして、第二の要因は、「草稿」において展開されいう点である。そして、第二の要因は、「草稿」において展開されいう点である。そして、第二の要因は、「草稿」成立の経緯と、著者自身による評価とである。つまり、この著作は、執筆途中で放棄され、後年のフロイト自身によって、その価値を否定されていたとされ、後年のフロイト自身によって、その価値を否定されていたという点である。そして、第二の要因がある。まず、マイナスに評価される面ストレイチーによれば、「草稿」には、マイナスに評価される面ストレイチーによれば、「草稿」には、マイナスに評価される面

の全ての理論的著作に最後までつきまとっていたのだ。」り、「「草稿」は、というより「草稿」の見えざる亡霊は、フロイト後年のフロイト心理学理論の大方の核心部分をその中に含んで」お稿」は、「見かけ上は神経学の論文であるにもかかわらず、実は、レイチーは、プラスに評価すべき理由も挙げている。つまり、「草以上のように、マイナスに評価すべき理由を挙げる一方で、スト

チーはどちらかと言うと、マイナスの評価の方に重点を置いており、

モデルでは、後年の〈本当の〉エディプス・コンプレックス概念に

だが、この引用の表現の調子からも察せられるように、ストレイ

表していると言える。これが、権威あるスタンダード版の評価として、一般的な評価を代

用語法へと「翻訳」したものだ、とさえ見なされている。 ま象の心理学」とは、神経学的用語法を用いた「草稿」を心理学的の心理学」への「草稿」の影響だ。場合によっては、「第七章 夢事象の心理学」とは、神経学的用語法を用いた「草稿」を心理学的できたわけだが、本稿では、「草稿」がフロイトの理論的著作の隠てきたわけだが、本稿では、「草稿」がフロイトの理論的著作の隠このように「草稿」は今までアンヴィバレントな評価を与えられ

ックス概念との間には、決定的に異なる点がある。つまり、「草稿」がら、その後の展開の可能性を内包していたことを証明した〉とがう点にあるのだろうか。そのような意味での重要性も確かにあるだろうが、本稿で論じたいのは、それとは違った重要性を含む後年のフロイト理論の原型――より精確に言えば、神経学的用語法で「草稿」の中で展開される心的装置のモデルの中に、エディプス・コンプレックス概念に対応する概念を見出すことが出来るはずだ。そして実際、「草稿」の中に、それらしい概念装置を見出すことが出来る。しかしながら、「草稿」モデルの中に見出せるエディプス・コンプレックス概念に対応する概念を見出すことが出来るはずだ。マカス概念との間には、決定的に異なる点がある。つまり、「草稿」の主要性とは、〈フロイト理論が、そのごく初期から、その後の展開の可能性を内包していたことを証明した〉と期から、その後の展開の可能性を内包していたことを証明した〉と期から、そのだろうが、本稿では、決定的に異なる点がある。つまり、「草稿」のコンプレックス概念と、後年の〈本当の〉エディプス・コンプレックス概念との情には、決定的に異なる点がある。つまり、「草稿」

る。 とって不可欠の要素である父に対応する要素が登場しないのであ

より精確に言えば、「草稿」には、父だけではなく母も登場しない。ただし、おおよそ母に対応すると見ていい要素は登場する。それは、「経験豊かな個体 an experienced person」であり、それは、「経験豊かな個体 an experienced person」であり、それは、自身を第一者と考えれば、この「経験豊かな個体」は第二者である。自身を第一者と考えれば、この「経験豊かな個体」は第二者である。わけだが、不思議なことに、「草稿」モデルでは、この第三者が登者に、第三者である父が関わることで、メカニズムが展開していく者に、第三者であるとに、「草稿」モデルにおいては、この機能は、第三者の介入ではなくて、「自我による禁止 inhibition by the ego」によっ介入ではなくて、「自我による禁止 inhibition by the ego」によった第三者のようなものによる機能として見なすことは、難しいようた第三者のようなものによる機能として見なすことは、難しいように思われる。

とは出来ないはずだ。

とは出来ないはずだ。

を内ものに関わる違いであり、部分的な修正によって結びつけるこか三者かという違いは、エディプス・コンプレックスのメカニズムが三者かという違いは、二者関係が問題になっているのだから。二者プス・コンプレックスでは、三者関係が問題になっているのに対し、この違いは根本的だと思われる。なぜならば、〈本当の〉エディこの違いは根本的だと思われる。なぜならば、〈本当の〉エディ

では未だ、理論的に完成途上だったのであり、後年に至ってはじめしかし、次のような反論があるかも知れない。すなわち、「草稿」

も、記憶の中から馬のイメージが現れた場合もあるだろう。もちろ

て、〈本当の〉理論―三者関係から成るメカニズムに到達したのだ、 だから、未熟な「草稿」モデルが二者関係から成っていたとしても、 大して問題ではない、と。だが、それならば、「草稿」に対して概 して否定的だったストレイチーですら認めざるをえなかった事実、 すなわち後年の円熟期の理論的著作に対して〈未熟な〉「草稿」が 影響を与え続けたことを、どう理解したらよいのだろうか。 エディプス・コンプレックス概念を洗い直そうというのが、筆者の (â)。 考えである。

### 2. 「草稿」第一部の論理展開

が現れた場合もあるだろうし、また、現実にその場に馬がいなくてという。たとえば、心的装置の中に、馬のイメージが現れたとする。による現象との二種類がある、という点である。筆者なりの解説をによる現象との二種類がある、という点である。筆者なりの解説をによる現象との二種類がある、という点である。筆者なりの解説をによる現象との二種類がある、という点である。筆者なりの解説をによる。たとえば、心的装置の中に、馬のイメージが現れたとする。しよう。たとえば、心的装置の中に、馬のイメージが現れたとする。この場合、外界に現実に存在する馬を知覚したために馬のイメージが現れた場合もあるだろうし、また、現実にその場に馬がいなくてはれる)の特別を流れ滞留という。「草稿」においては、「草稿」第一部で述べられていることを要約しよう。「草稿」まず、「草稿」第一部で述べられていることを要約しよう。「草稿」をする。

るをえないだろう。 外界に対応物を持たず、心の内側からの刺激による現象と見なさざ獣のイメージが心的装置の中に現れた場合には、そのイメージは、覚を原料としていると考えることは出来る。しかし、たとえば一角ん、この記憶の中の馬のイメージも、元々は外界に存在する馬の知

想 remembering」) シ呼添。 部からの刺激」が、感覚器官とφ ニューロンを介して、φ ニュー る。 φ ニューロンとは、外界に曝された感覚器官と直接結びつい<sup>(2)</sup> ロンからの量Q(「外部からの刺激」)であり、もう一つは、「内因 ている「(なんの抵抗もしないし、なにも滞留させない)透過性\_ ニューロンとψ ニューロンという二種類のニューロンを想定す よって生じる心的現象を「(想像的) 表象 imaginary idea」(=「回 性刺激」である。このような道具立てを行った上で、フロイトは、(語) φ ニューロンが受け取る量Qには、二種類ある。一つは、φ ニュー った、量Q。を保持する)非透過性」のニューロンである。後者の あり、それゆえにおそらく心的現象全般の担い手である(抵抗を持 のニューロンである。一方、ψ ニューロンとは、「記憶の担い手で ロンに受け取られることによって生じる心的現象を「知覚」と呼ぶ。 上記の二種類の心的現象を、次のように記述する。すなわち、「外 一方、「内因性刺激」が、直接 φ ニューロンに受け取られることに このような心的装置の働きを説明するために、フロイトは、も

and unpleasure」である。

はもう一つ「それとは非常にちがった別の系列」がある。それは、

「快と不快の感覚の系列 the series of sensations of pleasure

ではない。 φ ニューロンに「外部からの刺激」が到達することでただし、精確に言えば、 φ ニューロン自体が「知覚」を行うの

だと見てよいようなのだが、フロイトによれば、「意識の内容」にのニューロンに伝えられることによって初めて、「知覚」のことにのニューロンの中に生じる興奮刺激(量Q+質)の質的側面が、たψ ニューロンに伝えられて、「意識的感覚 conscious sensations」、「感覚的質 sensory qualities」が生じるのである。この「意識的感覚」が、私たちの通常の意味での「知覚」が生じる。この「意識的感覚」が、私たちの通常の意味での「知覚」が生じる。この「意識的感覚」が、私たちの通常の意味での「知覚」が生じる。この「意識的感覚」が、私たちの通常の意味での「知覚」のことだと見てよいようなのだが、フロイトによれば、「意識の内容」に、から、「知覚」が生じるの「意識の内容」に、から、「知覚」が生じるのである。

(A) フロイトは、「不快を避けるという心的生活の一傾向」になから、快に対する欲求とは、量Qの水準の低さへの欲求ということは、「草稿」モデルにおいては、量Qの水準が低いことを意味すとは、「草稿」モデルにおいては、量Qの水準が低いことを意味をは、「草稿」モデルにおいては、量Qの水準が低いことを意味をは、「草稿」モデルにおいては、量Qの水準の低さへの欲求ということになる。

ばならないだろう。逆に「快とは、放出 discharge の感覚であるとは、Q<sup>®</sup>の水準の上昇、すなわち量的圧力の増大と一致しなけれ(B) そして、もしもこの同一視が正しいとするならば、「不快」

が減少する時のω ニューロンの感覚であるだろう。 ニューロンの水準が上昇すると、ω ニューロンの中のカセクシス だろう」。フロイトの考えでは、 4 ニューロンと 6 ニューロンと よって、不快とは、ψ ニューロンの中でQ が増大する時のω ニ が増大し、反対に、水準が下降すると、カセクシスは減少する」。 は一種の「通底器 intercommunicating vessels」をなしており、「ゅ ューロンの感覚であるだろうし、快とは、ψ ニューロンの中でΩη

感覚」との関係はどうなっているだろうか。 それでは、先に述べた「意識的感覚・感覚的質」と「快と不快の

こると、消失する」。 the [presence of the] feeling of pleasure and unpleasure が起 置する感覚的質を知覚する性質 aptitude は、快と不快の感じ (C) フロイトによれば、「快と不快との間の無関心の領域に位

不快との間の中間状態であり、「意識的感覚」と「快と不快の感覚」 セクシスが無くなってしまい、ニューロンの動きの周期を受容する 快を生み出し、より弱い時には、快を生み出す。そして、それはカ とは両立しえないものと見なされているわけだ. ことが出来なくなるまで続く。」つまり、「意識的感覚」とは、快と 適状態になる。カセクシスがより強い時には、∞ ニューロンは不 シスの時に、ニューロンの動きの周期 period を受容するための最 (D) つまり、「ω ニューロンは、ある特定の(強さの)カセク

だが、本稿において問題にしたいのは、上記の「ニューロン」その 以上のような道具立てを用いて「草稿」モデルは展開していくの

> 立てを用いてなされる論理構成にだけ注目していきたい。 他が実在するかどうかという点ではない。あくまで、それらの道具

う。それでは、「同時性による連想」とは何だろうか。 「同時性による連想 association by simultaneity」であると言 まず、「諸ニューロン間のすべての結びつきの基礎」となるのは、

まり、イメージαに対応する或る特定のφ ニューロンに量Qが流 憶したとしよう。すると、その後再びイメージα を思い出す時 (つ 過去において、イメージα とイメージβ とをたまたま同時に記

対応するニューロンに流れ込んだ量Qは、「同時性による連想」に らいたくなる。もしも、「同時性による連想」などがなければ、そ でいた量Qは減少することになる。 り、イメージα に対応するψ ニューロンに流れ込んた量Qが、直 連想」があるために、事態は違った風に展開する。 イメージα に 授乳してもらうことになるだろう。しかし実際は、「同時性による の後の事態は簡単だ。幼児は泣き声をあげ、結果的には養育者から に対応するψ ニューロンに量Qが流れ込む。つまり、授乳しても と、イメージα すなわち〈授乳によって生じる生理的な満足体験〉 感〉だとしてみよう。まず、主体(この場合は幼児)が空腹になる イメージβ を〈授乳による満足体験と同時に得られた、口唇の触 そしてその結果、イメージα に対応するφ ニューロンに流れ込ん ちに、イメージβ に対応するφ ニューロンへと移動していく)。 れ込む時)、それと同時に、イメージβ も思い出されてくる (つま たとえば、イメージαを〈授乳によって生じる生理的な満足体験〉、

触感〉の方を欲するようになる。 足体験〉そのものに対する欲求が減少し、その代わりに、〈口唇の ロンへと移動していく。すると、〈授乳によって生じる生理的な満

る)への執着がそうである。 また、大人の場合でも、食べ物のおいしさ(イメージβ に相当す れるというわけだ。たとえば、おしゃぶりの使用がそうであるし、 欲求が、生理的ではないイメージ的・情報的な欲望へとすり替えら 思われる。つまり、「同時性による連想」によって、本来の生理的 このような考え方は、人間の欲望の特徴をよく表しているように

が、「一次過程」における致命的問題である。 う一つ別のイメージの追求へとすり替わってしまうこと ―― これ えば、イメージが外界の対象の現実的獲得のために役立たずに、も の完全な発展」を、「心的な一次過程」と呼んでいる。要約して言 ひき起こされるならば、必ず失望に終わる。」そして、このような のように表現する。すなわち、「幻覚にもとづいて反射的な行為が 方を追求してしまうことになるからだ。フロイトは、この問題を次 り替えによって、幼児は、イメージβ (つまり、口唇の触感) てもらうこと)が必要であるのに、「同時性による連想」によるす イメージα をもたらす外界の対象の獲得(つまり、現実に授乳し 幼児にとって致命的な問題を引き起こす。幼児の生存にとっては、 「幻覚にいたるまでの願望備給と十分な防衛の消費をともなう不快 だが、このような、欲望の「同時性による連想」メカニズムは、

> らの刺激によって生じる「表象」とを区別できるようなメカニズム る。」つまり、外部からの刺激によって生じる「知覚」と、 ion と表象 idea とを区別する基準をどこからか得る必要があ の対応を確立することだ。別の側面から言えば、「知覚 percept によって得られる心的満足(イメージα )と、現実の授乳体験と 象との対応関係〉を確立することだろう。既述の例で言えば、 言い方をすれば、ヘイメージと、そのイメージが意味する現実的対 すりかわってゆくという状態そのものを変更することだろう。 ろうか。それは、イメージがもう一つの別のイメージへと連想的に 「一次過程」におけるこの問題を解決するためには、何が必要だ 別の

時性による連想」に従う「一次過程」)なのである。 とを区別出来ないという点こそが、人間の心的装置の基礎条件(「同 くいからだ。しかし、「草稿」の考え方によれば、「知覚」と「表象」 うに思えるので、敢えて、その区別のための基準が必要とは考えに ば、外部からの刺激と内部からの刺激との区別は、出来て当然のよ このような「草稿」の考え方は、奇妙に見えるだろう。 なぜなら

が必要なのである。

ロン)が、「現実性判断」を担っているのだ。 ment of reality, belief」と呼ぶ。そして、この「現実指標」は と表象を区別する」ことを、「現実性判断あるいは確信 a judgethe indication of reality」と呼び、「現実指標」を用いて「「知覚 ω ニューロンから来ると言う。つまり、ω ニューロン (知覚ニュー フロイトは、この「知覚と表象を区別する基準」を、「現実指標

が機能してしまうからだと言う。 「知覚」だろうと「表象」だろうと関係なく)、つねに「現実指標のみ、「現実指標」は適切に機能すると言う。なぜこのような条件のみ、「現実指標」は適切に機能すると言う。なぜこのような条件が必要なのかといえば、量Qが充分に大きい場合には、量Qが外部がらの刺激であろうと内部からの刺激であろうと関係なく(つまり、ががしていなくてはならない、とフロイトは付け加える。すなわが機能してしまうからだと言う。

次過程」と呼ぶ。 a correct employment of the indications of reality」が行われ、a correct employment of the indications of reality」が行われ、このように「自我による禁止」の下で「現実指標の適切な使用このように「自我による禁止」の下で「現実指標の適切な使用

ジは「表象」であると判断するわけだ。 ジは「表象」であると判断するわけだ。 ジは「表象」であると判断するわけだ。 ジは「表象」であると判断するわけだ。 であると判断する何らかの基準(「現実指標」)が必要なわけだが、この基準とは何だろうか。それは何よりも、〈現実の外的対象を確実に意味とは何だろうか。「草稿」によれば「一性 an identity」を確立することである。既述のは、「知覚」と「表象」とをとは何だろうか。であると判断するわけだ。

とは何だろうか。フロイトによれば、それは、「最初に満足を与えでは、この〈現実の外的対象を確実に意味している心的イメージ〉

判断することだと言えるだろう。ているイメージが、最初に経験したイメージと一致するかどうかを標」なのだ。そうだとすれば、「現実性判断」とは、主体が今感じメージである。つまり、最初に経験したイメージこそが、「現実指てくれる対象であると同時に最初の敵対的対象」であるもののイ

以上のような議論をした後で初めて、「草稿」は夢の問題に取り以上のような議論をした後で初めて、「草稿」の第一部は終了しているのである。の第一部は終了しているのである。実際、『夢判断』において有名な「夢生駆を成しているのである。実際、『夢判断』において有名な「夢生駆を成しているのである。実際、『夢判断』において有名な「夢生い願望充足である」という言明は、「草稿」のこの部分に既に現とは願望充足である」という言明は、「草稿」のこの部分に既に現とは願望充足である」という言明は、「草稿」のこの部分に既に現れているし、精神分析理論確立にとってもっとも重要な夢である「イルマの注射の夢」が、ごく簡単にではあるが、分析されて、「草稿」の諸性質を知るできる数少ない機会が睡眠時であり、「一次過程」の諸性質を知るできる数少ない機会が睡眠時であり、「一次過程」の諸性質を知るできる数少ない機会が睡眠時であり、「「草稿」は夢の問題に取り以上のような議論をした後で初めて、「草稿」は夢の問題に取り以上のような議論をした後で初めて、「草稿」の第一部は終了しているのである。

にして初めて、夢は問題となるのだ。いかにして構成されるか、という問題についての論理的思考を背景われる。つまり、「知覚」はいかにして成立するか、リアリティは夢を問題にすることの論理的な背景が明らかになってくるように思ってのような「草稿」の議論の流れを見てくると、フロイト理論が

#### 3. 「草稿」の内在的矛盾

かしながら、ここで私たちは当面、二つの疑問点にぶつかる。コンプレックスの克服の問題に対応することは言うまでもない。し程」への転換の問題が、後年のフロイト理論におけるエディプス・ロジックを追ってきたわけだが、上記の「一次過程」から「二次過ここまで、「草稿」第一部の議論を要約しながら、その基本的な

という点に関している。一見すると、このことはもっともなように第二の疑問は、最初に経験したイメージが、「現実指標」になる

思える。なぜなら、最初の経験(大抵は、最強度の経験)とは、す思える。なぜなら、最初の経験(大抵は、最強度の経験)とは、すいて、心的装置の基礎条件すなわち「苦ニューロン間のすべてのおいて、心的装置の基礎条件すなわち「諸ニューロン間のすべてのおいて、心的装置の基礎条件すなわち「諸ニューロン間のすべてのおいて、心的装置の基礎条件すなわち「諸ニューロン間のすべてのおいて、心的装置の基礎条件すなわち「諸ニューロン間のすべてのおいて、心的装置の基礎条件すなわち「諸ニューロン間のすべてのおいて、それが「表象」ではなく「知覚」であると保証されうるのだろうか。「同時性による連想」を議論の出発点とする限り、最初に経験のイメージは当然「一次過程」におけるイメージは、それが「知覚」なのかってそれが「表象」ではなく「知覚」であると保証されうるのだろうしたイメージが「現実指標」になることは原理的に不可能ではないしたイメージが「現実指標」になることは原理的に不可能ではないだろうか。

できないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」が成立不可能であるように見えるにもかかわらず、フロイトが「現実性判断」メカニズムの妥当性を信じていたとするならば、何か「草寒性判断」メカニズムの妥当性を信じていたとするならば、何か「草って、このような特権性は、「草稿」の内在的な議論だけからでは、それは、〈最初の経験のイメージは、それがまさに最初であるが故に、現実的であるはずだ〉という暗黙の信念だと思う。つまり、〈最初であること)に、リアリティの基準としての特権性を与えることによって初めて、「現実性判断」メカニズムは完結するように思われる。そしめて、「現実性判断」メカニズムは完結するように思われる。そしめて、「現実性判断」メカニズムは完結するように思われる。そしめて、「現実性判断」メカニズムは完結するように思われる。そしかできないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」できないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」できないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」できないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」できないのだから、結局のところ、「一次過程」から「二次過程」が成立では、現実性判断」

ンプレックス理論もまた、同様の亀裂を孕んでいると言えるのではコンプレックス理論の先駆形であるとするならば、エディプス・コ更に、冒頭で述べたように、「草稿」モデルが後年のエディプス・への転換メカニズム自体が、亀裂を孕んでいるということになる。

ないだろうか。

は異なるリアリティ論が展開できるように思われるのである。は失敗作であるかもしれない。しかし別の見方をすれば、「草稿」は失敗作であるかもしれない。しかし別の見方をすれば、「草稿」である暗黙の信念を除き、「草稿」の内在的な論理だけを徹底させる時、そこから、著者であるフロイト自身が意識的に意図したのとる時、そこから、著者であるフロイト自身が意識的に意図したのとない。とかし別の見方をすれば、「草稿」は異なるリアリティ論が展開できるように思われるのである。

## 4.「草稿」における二種類の「快感原則」解釈

にだけ話を限定して論じていこう。では、「草稿」モデルが孕んでいるもう一つの亀裂を、「一次過程」フロイトの思考の現場を垣間見るのに便利だという点である。以下上記のような議論の亀裂が比較的純粋な形で表現されているため、上記のような議論の亀裂が比較的純粋な形で表現されているため、

る快/不快メカニズムは、スタンダード版の脚注にもあるように、かという問題に集約されるだろう。既述した、「一次過程」におけ「一次過程」に関する諸問題は、快/不快が如何なる性質を持つ

解釈でうまく理解することが出来るのだろうか。る。それでは、「草稿」における快/不快メカニズムも、「快感原則」後年のフロイト理論における「快感原則」の原型をなすものであ

デルはそれだけでは説明できないように思われる。 
、「草稿」では、量Q)の水準が低い場合には、快か生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求が生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求が生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求が生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求が生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求が生じ、逆に、高い場合には、不快が生じると。だから、快を追求が生じ、逆に、高い場合には、保管が出ているように関系されてきた。すなわち、「快感原則」は、従来、次のように解釈されてきた。すなわち、

なく、量Qの水準の下降である。つまり、快/不快を生み出すのは、準の上昇である。一方、快を生み出すのは、量Qの水準の低さではめば、不快を生み出すのは、量Qの水準の高さではなく、量Qの水つまり、第二節で示した快/不快メカニズムの(B)を素直に読

時、すなわち量Qが変化している時には、「意識的感覚」は知覚さい。(「意識的感覚」と「快と不快の感覚」との関係)も変わってくるの言明は、〈通常の意味での知覚に相当する「意識的感覚」とは、外や不快が生じている時、つまり量Qのかが、、(通常の意味での知覚に相当する「意識的感覚」とは、といる時、(重要が変化している時には、「意識的感覚」との関係)も変わってくるの解釈が正しいとすれば、説明メカニズムの(C)の解釈もしこの解釈が正しいとすれば、説明メカニズムの(C)の解釈

量Qの状態ではなく、量Qの変化なのである。

れない〉ということを意味すると思われる。

されていなかったが)は、二種類の解釈の混合なのである。つまり、「草稿」における「快感原則」解釈(そういう命名はまだ明らかに、従来の「快感原則」解釈と同じであることは否めない。ただし、第二節の快/不快メカニズムのうち、(A)(D)は、

を感じることは事実上、殆ど不可能になってしまう。を感じることが出来るのは、量Qがある特定の水準に静止している場合だけであり、(静止状態だろうと変化状態だろうと)それ以外の全ての状態では、快/不快の感覚が生じてしまい、「意識的感覚」を感じることが出来なのになってしまう。これでは、「意識的感覚」を感じることは事実上、殆ど不可能になってしまう。

また、もし、従来の解釈の言う通り、快を生み出すのが《量Qの水準の低さ》であるならば、心的装置が死んでいる状態なのだから、心的な置は死の状態を目指すという奇妙な結論になってしまう。つまり、がゼロということは、心的装置が死んでいる状態なのだから、心的がゼロということは、心的装置が死んでいる状態なのだから、心的ないで、最大の快を得ようとするはずだ。ところが、量Qの水準をどいう不可解な結論に到ってしまう。

な問題は生じなくなる。 の変化だ〉という「草稿」特有の解釈を採用すれば、今挙げたようの変化だ〉という「草稿」特有の解釈を採用すれば、今挙げたようしかし、〈快/不快を生み出すのは、量Qの状態ではなく、量Q

えば、量Qの水準が静止していさえいれば、量Qの水準の値がいくまず、「意識的感覚」と「快と不快の感覚」との関係について言

らであっても、「意識的感覚」を知覚することが出来る。

指されているのではなく、量Qの水準の下降と上昇の反復が目指さ続来の解釈と同様、量Qがゼロになる状態を目指しているように思えるが、実際はそうではない。なぜならば、量Qがゼロになってしまるが、実際はそうではない。なぜならば、量Qがゼロになってしまなくなってしまう。下降(快)できるためには、上昇(不快)がなければならないのだ。つまり、「草稿」特有の解釈による「快いなければならないのだ。つまり、「草稿」特有の解釈によれば、快は、量Qの水準が下降することから生じる。これは一見すると、快は、量Qの水準が下降することから生じる。これは一見すると、快は、量Qの水準が下降することから生じる。これは一見すると、大に、「死の本能」について言えば、「草稿」特有の解釈によれば、大に、「死の本能」について言えば、「草稿」特有の解釈によれば、

は思われる。 点で、「草稿」モデル特有の解釈の方が優れているように、筆者に点で、「草稿」モデル特有の解釈の方が優れているように、筆者に以上のように二種類の解釈を比較してみると、論理的な整合性の れているのである。

筆者が最後に注目したいのは、この点である。モデルが、後年の論文「快感原則の彼岸」に影響を与えていること、このように「快感原則」についての新しい解釈を要求する「草稿」

## 5.「草稿」の視点から見た「快感原則の彼岸」

原則によって規制されていると。」という一文から始まる「快感原うに仮定する。すなわち、心的出来事がたどる軌跡は自ずと、快感「精神分析の理論において、私たちはためらうことなく、次のよ

性のままで提示することを目指した論文である。 いっの明確な結論に到達することよりも、多くの理論的可能性を可能等、死の本能に仕えているように見える。」という有名な言明を含い、死の本能に仕えているように見える。 しかし、「快感原則は実調の彼岸」は、一言で言えば、「快感原則」という仮定から何が帰則の彼岸」は、一言で言えば、「快感原則」という仮定から何が帰

うちに、この二種類を混同して用いているのだ。の解釈には、構造的に異なる二種類があり、フロイト自身知らないを指摘することが出来る。つまり、この論文における「快感原則」「草稿」からの視点を取ることによって、この論文の一つの特徴

けだ。このように、「快感原則の彼岸」では、「草稿」独自の視点が 大変明確に区別した上で、快/不快は、「一定の単位時間内における力セクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの絶対的な大きさ、おそらくはカセクシスの水準」と、「カセクシスの大きさの変化」の方と結びつくと見なされているわなが、第一の解釈は、「不快を興奮の量の増加と対応させ、快を要奪の量の増加と対応させ、快を要奪の量の増加と対応されているわなが、第一の解釈は、「不快を興奮の量の増加と対応されているわなが、第一の解釈は、「一定の単位、「単位、「中である」というないでは、「中である。ここで、ペリカである。ここで、ペリカである。

より明確化された形で復活している。

-- これが、「草稿」からの視点ではないだろうか。の「快感原則」解釈に、このような欠落があることに気付くことが、従来の「快感原則」解釈を代表していると言えるだろう。従来第一の解釈の可能性が排除されているのが分かる。このような立場の解釈の方だけが問題にされており、あらかじめ、

たとえば、『精神分析用語辞典』の「快感原則」の項目を見てみ

二種類の解釈の間で生涯揺れ続けたというのが、実情だろう。しかえも、第一の解釈を徹底させたわけではなかった。フロイト自身が、自身は、「草稿」においても、また「快感原則の彼岸」においてさと深く関わっているものと思われる。なるほど、たしかにフロイトへ量Qの絶対値ではなく、その変化の方に注目する快感原則の解釈、フロイト理論における「草稿」の重要性は、第一の解釈すなわち、

ように関係するのかについては、別に稿を改めて論じたい。 るエディプス・コンプレックス・モデル〉と、第一の解釈とがどの とりわけ、冒頭で述べたような、「草稿」特有の〈二者関係から成 もたらし、その結果、フロイト理論がどのように再構成されるのか ではないだろうか。実際にこの第一の解釈が、どのような諸帰結を を払うことで、フロイト理論を更に多面的に捉えうるようになるの すぎてきたように、筆者には思われる。第一の解釈にも相応の注意 し、従来、「快感原則」の解釈が、あまりに第二の解釈の方に偏り

- (—) Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, Vocabulaire de la psychanalyse 訳『精神分析用語辞典』みすず書房、一九七七、二八頁)。 Presses de Universitaire de France, 4º édition revue, 1973(村上仁監
- (a) Sigmund Freud, "Project for a Scientific Psychology," translated Press, 1966.(小此木啓吾訳「科学的心理学草稿」、懸田克躬・小此木 Complete Psychological Works of Sigmund Freud Vol.1, The Hogarth by James Strachey. in James Strachey ed., The Standard Edition of the 啓吾訳『フロイト著作集 第七巻 ヒステリー研究他』人文書院、一
- (3) Ibid., p.290. 人文書院版には、スタンダード版の解説は入っていな
- (4) *Ibid.*, p.291
- (15) Ibid., p.290
- (6) *Ibid.*, p.290
- 院、一九七〇所収、四三七頁。 木啓吾他訳『フロイト著作集 小此木啓吾「改題およびメタサイコロジィ解説」、井村恒郎・小此 第六巻 自我論・不安本能論』人文書

- (8) Freud, op.cit., p.318. (邦訳、二五四頁)。本稿におけるフロイトか らの引用は、邦訳と必ずしも同一ではない。
- (9) *Ibid.*, p.326. (邦訳、二六一頁)。
- (10) たとえばジャック・ラカンの理論が、そのような理論だと思われる。 明視されてきた従来のエディプス・コンプレックス解釈自体を問題に 見かけ上は三者関係であるが、実際は二者関係であると。よって、自 なくなるだろう。つまり、エディプス・コンプレックス・モデルは、 係から成っているという前提を放棄すれば、ラカンの主張は奇妙では る前提 —— 〈本当の〉エディプス・コンプレックス・モデルは三者関 を主張するのは奇妙に映る。しかし、もし私たちが自明と見なしてい の違いがあることを思えば、ラカンが、フロイトの思考の首尾一貫性 エディプス・コンプレックス・モデルとの間に、既述のような構造上 Seuil, 1981, pp.117-162., p.138.) だが、「草稿」モデルと、〈本当の〉 dans la technique de la psychanalyse (1954-1955), séminaire, livre II Seuil, 1986, p.45. Jacques Lacan, Le moi dans la théorie de Freud e Lacan, L'éthique de la psychanalyse (1959-1960), séminaire, livre VII ら心理学的な思考へと転換した」という従来の解釈を批判し、「フロ 稿」から『夢判断』への展開において「フロイトが機械論的な思考か ラカンは『セミネール』の中で、「草稿」の重要性を強調しながら、「草 する必要があると。 イトの思考は常に首尾一貫していた」ことを主張している。(Jacques
- (11) Freud, op.cit., p.297. (邦訳、二三四頁)。
- (12) *Ibid.*, p.300. (邦訳、二三七頁)。
- (3) *Ibid.*, p.304. (邦訳、二四二頁)。
- 二四六頁)。

(邦訳、二四六頁)。*Ibid.*, p.325. (邦訳、二六○頁)。

(15) *Ibid.*, p.309. (邦訳、 (4) Ibid., p.308.

- (f) Ibid., p.309. (邦訳、 二四六頁)。
- (7) Ibid., p.312. (邦訳、二四九頁)。
- (18)*Ibid.*, p.312. (邦訳、二四九頁)。

- (19) Ibid., p.319. (邦訳、二五五頁)。
- (20) *Ibid.*, p.319. (邦訳、二五五頁)。
- (21)*Ibid.*, pp.328-329. (邦訳、二六三頁)、および Joël Dor, *Introduc* うに、食物の欲求において欲動を満足させるもの、それは食物という Editions Denoël, 1985.(小出浩之訳『ラカン読解入門』岩波書店、 tion à la lecture de Lacan –1. L'inconscient structuré comme un langage 対象ではなくて、《口の快感》である。」 九八九、一六二頁)の次の言明を参照。「ラカンが指摘しているよ
- (22) Freud, op.cit., p.319. (邦訳、二五六頁)。
- (3)*Ibid.*, pp.326-327.(邦訳、二六二頁)。
- <u>25</u> (24) *Ibid.*, p.325. (邦訳、二六○頁)。
- 26 *Ibid.*, p.325. Ibid., p.333. (邦訳、二六一頁)。 (邦訳、二六七頁)。
- 28 (27) *Ibid.*, p.325. Ibid., p.327. (邦訳、二六二頁)。 (邦訳、二六一頁)。
- 29 Ibid., pp.328-332. (邦訳、二六三~二六七頁)。
- 30 Ibid., p.331. (邦訳、二六五~二六六頁)。
- (31) *Ibid.*, pp.335-343. (邦訳、二六九~二七五頁)。 *Ibid.*, p.340. (邦訳、二七三頁)。
- (33) *Ibid.*, p.341. (邦訳、二七四頁)。
- (3) たしかに、「草稿」第一部の「第一五節 φ における一次過程と1 別の角度から検討されている。それによれば、〈二次過程とは、一次 違いは、量的な違いにすぎないように見える。しかし、その後の「第 次過程」における議論だけを見る限りでは、一次過程と二次過程との ることから、いかなる問題が引き起こされるか、について論じていく 結論を再確認した上で、より大きな量Qがより小さな量Qへと転換す 過程を、より少ない量Qによって繰り返すことだ〉という第一五節の 思考と現実」では、一次過程と二次過程との違いについて、

(*Ibid.*, p.334. (邦訳、二六八頁))。その結果フロイトは、「ただ一つ

- 研究会、一一六号掲載予定の拙稿を参照。 することになる。このメカニズムについては、『ソシオロジ』社会学 の可能な答え」として、「副次備給」という新しいメカニズムを導入
- (35)「満足の最初の体験」の特権化については、Dor, op.cit.(邦訳、一 六五頁)参照。フロイトの暗黙の信念については、若森栄樹『精神分
- 析の空間 ―― ラカンの分析理論 ―― 』弘文堂、一九八八、二二七~二 二八頁参照。本稿は、この著書に多くを負っている。
- (36)Freud, *op.cit.*, p.312. (邦訳、三一六頁)。但し、邦訳では部分的に 省略されている。
- (37)「草稿」の冒頭部分でも、たしかに、「量Q゚の水準をゼロにしよう 訳、二三五頁)参照。 とする根源的な傾向」という表現が用いられている。*Ibid.*, p.297. (邦
- (38)「草稿」の中では、この側面はあらわにはならないが、ある意味で が全面的に展開されている。 「草稿」の理論的再生とも言える「快感原則の彼岸」では、この側面
- $(\mathfrak{S})$  Sigmund Freud, "Beyond the Pleasure Principle" in *The Pelican* 自我論·不安本能論』人文書院、一九七〇所収、一五〇頁)。 則の彼岸」、小此木啓吾・井村恒郎他訳『フロイト著作集 Psychoanalysis, Penguin Books, 1984, p.275. (小此木啓吾訳「快感原 Freud Library vol.11 On Metapsychology : The Theory of
- (40) Ibid., p.338. (邦訳、一九四頁)。
- (41) *Ibid.*, p.276. (邦訳、 (4) Ibid., p.276. . (邦訳、 一五一頁)。 一五一頁)。
- 44 (3) Ibid., p.337. (邦訳) 一九三頁)。
- Ibid., p.336. (邦訳、 一九三頁)。

(45) Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, op.cit. (邦訳三九頁)。

前掲の拙稿を参照。